

医療崩壊どう防ぐ

写真は毎日新聞 8 月 4 日朝刊。リードから一新型コロナウイルスの感染再拡大で、大阪府では新規感染者が 200 人を超えるなど連日のように過去最多を更新している。現時点では春の第 1 波に比べて重症者は少ないが、慢性的な医療スタッフ不足もあり、不安は尽きない。繰り返し襲いかかるコロナ禍の前に、医療崩壊を防ぐことはできるのか。

大阪の独自基準「大阪モデル」にも関わる記事であり、参考になることが多いので抜粋して紹介する。

府のデータを見ると、楽観できない現状がわかる。

6 月以降、累積感染者数が倍増する「倍加時間」は 5～6 日で、春先の第 1 波より勢いを増している。重症用病床の利用率は、確保病床が 32 床だった 4 月 9 日は 109.4% に上り、唯一、100% を超えた。現在は 20～30 代の感染者が目立ち、重症患者は春と比べると少ないが、8 月 2 日時点では 188 床に対し 23 人で、使用率は 12.2%。上昇傾向にある。府は現在、重症用 188 床、軽症・中等症用 1069 床を確保。今後、重症用を 215 床、軽症・中等症用を 1400 床まで拡充する。ただし、病床を確保しても運用できるとは限らない。りんくう総合医療センターの倭正也・感染症センター長は、府の計画にある病床数は、自治体が医療機関に要請している数字に過ぎず、『(重症用病床使用率が)低いから大丈夫』という発言は、現場目線では全く違う」と強調する。医療スタッフや保健所職員の確保も課題で、府の担当者も「病床以上にマンパワーが足りない」と打ち明ける。

十三市民病院では、6 月下旬に 1 人にまで減った入院患者が、8 月 3 日午後 5 時時点で 28 人に増加。満床(90 床)にはまだ余裕があるが、西口幸雄病院長は「なかなか回復しない高齢患者が増えれば、中等症、重症と病床はどんどん埋まっていくだろう」と予想する。「治療や看護に人が必要で 1 日に新規で受け入れられるのは 6、7 人が限界」と急激な患者増を危惧する。

7 月 28 日の対策本部会議で、府は「最悪の想定」についても示している。厚生労働省のモデルを使った試算では、ピーク時の新規感染者は「753 人」、重症入院患者は「1156 人」。府は重症化防止策でこうした経緯をたどらぬよう対処する考えだが、新規感染者数については、府健康医療部の藤井睦子部長も「どちらかと言うと、こちら(国モデルによる試算)に近いところで推移している」と認める。吉村洋文知事は、感染状況について「今は想定範囲内」しつつ、想定モデルの試算が現実となった場合、「医療体制はもたない」と危機感をあらわにした。見通しが定まらない中、手探りの対応が続く。

(2020年8月7日)

